

高住宮ノ谷遺跡 たかすみみやのたにいせき

& 高住牛輪谷遺跡 たかすみうしわだにいせき



高住宮ノ谷遺跡の調査終了！引き続き牛輪谷へ…

7月10日をもって、2ヶ年にわたる高住宮ノ谷遺跡の発掘調査が終了しました。発掘調査の最終段階では、なんと縄文時代早期(約8,500年前)の押し型文土器が谷の中から見つかりました。湖山池周辺においては最古級のもので、この地の歴史を考える上で重要な手がかりとなります。

今後は高住牛輪谷遺跡の本格的な発掘調査に移ります。こちらも昨年度調査の続きで、貴重な発見が相次ぐ…かもしれません(*~)v



ただいま
古代~中世頃の
水田跡を調査中！



高住宮ノ谷遺跡3区
(東から撮影)
← 押し型文土器
楕円形の文様を彫り込んだ棒状のもの(原体)を土器の表面で転がして文様をつけています。

鳥取西道路の遺跡を掘る！

第75号 2015年7月23日

遺跡を発掘すると「土器溜り」と呼ばれる遺構が見つかることがあります。どのような意味をもっているのでしょうか。



1,700年前に置かれた土器

遺跡を発掘すると、住居跡や溝以外でも、土器が集中して出土する場合があります。そうした遺構を土器溜りと言います。土器溜りができる理由には、土器をまとめて捨てる、意図的にまとめて置く、といったことが考えられます。ここでは意図的に置かれた例として、大柵遺跡を見ていきましょう。

この土器溜りからは、古墳時代前期(約1,700年前)の甕・壺・高杯・ミニチュア土器が出土しました。矢印の土器のように、いくつもの個体がまとまって出土していることが特徴的です。

では、なぜ土器が地面にまとめて置かれたのでしょうか。土器溜りの中には、祭祀用に作られたと考えられるミニチュア土器が含まれており、大柵遺跡では土器を用いたおまつりが行われたのではないかと考えています。

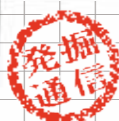
土器溜りの横には、拳大の川原石が積上げられていました。土器のほかに、石も使っておまつりが行われていたのかも知れません。



ミニチュア土器は、簡単に作った小型の手づくね土器です。



土器溜りとミニチュア土器 (左上)



夏休みもはじまり、暑さも本番ですが、発掘調査は今後も続きます。

暑さに負けず、どんどん調査を進めて行きます。みなさんも暑さに負けないよう、十分に水分補給してくださいね。

鳥取県教育文化財団 調査室

検索

(公財) 鳥取県教育文化財団 調査室

〒680-1133 鳥取市源太 12 番地

TEL: 0857-51-7553 FAX: 0857-51-7550

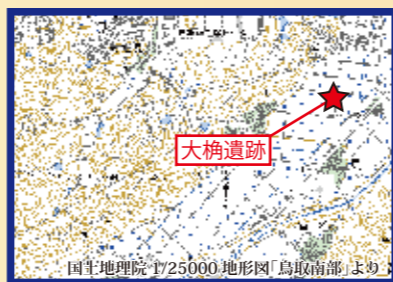
メールアドレス: tottori-kyobun@kyobun.sakuratan.com

HP: http://kyo-bun.sakura.ne.jp/chosasitsu new.htm

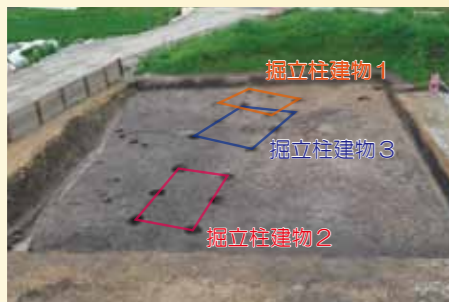


大楠遺跡

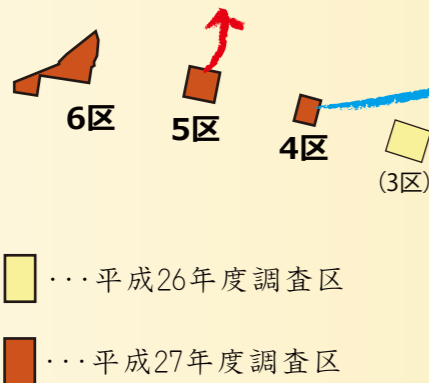
だいかくいせき



5区は、7月13日で調査を終了しました。調査最終面では古代のものと考えられる掘立柱建物を3棟検出しました。いずれも1間×2間と小さ目で、その長軸はいろいろな方向を向いていました。古代の人々が暮らしていた住居や倉庫だったと考えられます。



3棟の掘立柱建物（東から撮影）



4区は、6月29日に杭列の記録作業を終え、無事調査を終了しました。ここからは、古墳時代前期（約1,700年前）の鳥形木製品が出土しました。この木製品は、豊作を願うまつりや、死者の魂を運ぶ鳥として亡くなった人を葬るまつりに使用したと考えられています。そのほか、ムラの入口に立てられた柱の上に取り付け、集落の境界を見守っていたとする説もあります。

今回出土した鳥形木製品には、いったいどんな想いが託されていたのでしょうか？



鳥形木製品

発掘調査では、遺構や遺物の写真をたくさん撮影します。右下の写真では、撮影する範囲によって、(A) 高所作業車 (B) 三段タワー (C) 脚立を使い分けているところです。このほかにも、ラジコンヘリコプターにカメラを搭載し、上空からも撮影をします。もしかすると今話題のドローンが定番となる日も近いかも！？(・▽・)！

撮影した写真は、発掘調査報告書に載せられていますので、是非図書館で読んでみてください！！



遺跡の写真撮影風景

1-3区でみつかった弥生時代の田んぼには、直行する大小のあぜと、大きいあぜに沿った水路が設けられていました。田んぼを小さく区切り、水を行き渡らせる工夫をしていたことが見て取れます。



田んぼのあぜ、水路、人の足跡

松原田中遺跡

まつばらたなかいせき



地中梁と柱



ちちゅうばり ほったてばしらたてもの またまた、地中梁を伴う掘立柱建物が見つかった！

5月に発行した第73号では、松原田中遺跡5区を第4面まで調査した時点で「遺構・遺物ともに少ない。集落の北の外側だったのかも」と報告しました。その後調査した第5面（古墳時代頃）でも、周辺の調査区に比べると遺構数が少なく約30基ほどでした。

しかし、最終面となる第7面（古墳時代前期頃）では、東側から3分の1ほど調査が進んだ段階ですでに300基近くの遺構が現れました。

なかでも特筆すべきは、調査区北東部に位置する3棟の「地中梁を伴う掘立柱建物」(写真右)です。これらは、平行する2条の溝状の掘り込みの底に「地中梁」を据えて、そこに柱を立てるものです(写真上)。

全国から掘立柱建物は数多く見つかっていますが、「地中梁を伴う」ものは新潟県佐渡島の蔵王遺跡などわずかな例しかありません。それが松原田中遺跡では、これまでの調査とあわせて9棟も見つかっています。構造の把握や時期の確定を進め、その意義も解明したいものです。



建物6



建物7

下坂本清合遺跡

しもさかもとせいごういせき

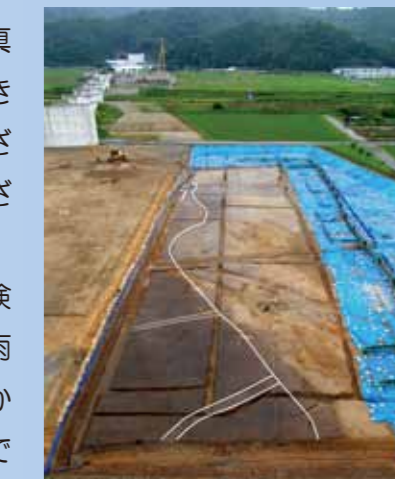
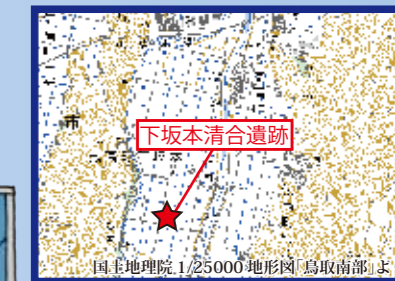
梅雨空を縫ったつもりが 追いつかれ



この便りが皆さんのお手元に届くころには、今年の梅雨はもう明けていでしょう。

梅雨の時期、ラジコンヘリコプターや高所作業車を使った、遺跡の空中写真撮影がスケジュールに入っているときは、週間天気予報とのにらめっこが続きます。空撮業者や高所作業車の手配をして、1日ばかりで掃除を終えて、いざ撮影本番の朝を迎えると雨だった・・・という悲劇を迎えないように、さまざまな気象情報を見比べて、検討に検討を重ねて撮影日を決定します。

これまでは、なんとかギリギリで雨雲をかわして来ましたが。今回も綿密な検討によって撮影日を決め、さらに予定を前倒したりして臨んだのですが、梅雨前線はひたひたと忍び寄り、前日の予報では午後から雨、そして当日は早朝からすでに弱い雨が！「おお神よ・・・」祈りが天に通じたのか、何とか小雨で持ちこたえて、撮影が終わるや否や、本降りとなりました。



室町時代ごろの田んぼの跡です